

## チベット仏教寺院におけるバリニ儀礼の比較研究の試み

——内モンゴルのイック・ジョー（寺）を中心に——

根敦阿斯尔

GENDUNASIER

非文字資料研究センター 2015 年度奨励研究採択者  
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 チベット仏教のゲルク派寺院の大きな法会の 1 つに祈願大法会というものがある。祈願大法会において重要な儀礼にチャム儀礼とバリニ儀礼がある。本稿では、チャム儀礼と関連の深いバリニ儀礼について分析を行いたい。中でも、「チェージャル・バリニ」というバリニ儀礼に注目する。

本稿で述べるチェージャル・バリニという供物とチャムという仮面の踊りは、2 つとも密教の三密法にモノと身体技法を組み合わせた密宗法会の中で最大の儀礼である。また、このチェージャル・バリニとチャムはゲルク派寺院の密宗の本尊であるヤマーンタカ（大威徳明王）の修法と関係がある。そのため、チェージャル・バリニの製作者や儀礼を行う担当者は、必ずヤマーンタカの閉関修行で本尊の観想を行う。

本稿の目的は、まず、内モンゴル地区と青海地区とのゲルク派寺院におけるチェージャル・バリニの比較研究によって、悪魔・悪鬼などを祓う法事に関する供物は何かという問題を再考察したい。筆者がチベット仏教における生死観の一種の表れであると考えているチャム（仮面舞踊）と、チェージャル・バリニ儀礼という供物についてラマ僧から聞き取り調査をし、さらに、筆者がラマ僧として経験した寺院の内部的観点と研究者として報告する外部的観点の 2 つの角度から再考察を試みる。

筆者の把握する限りでも、バリニはさまざまな種類が伝承されているが、本稿ではそのすべてを分析するわけではない。主に内モンゴル自治区のフフホト市のイック・ジョー（寺）で行われるチェージャル・バリニ儀礼の事例を分析する。また、フフホト市におけるチベット仏教寺院のチェージャル・バリニ儀礼の事例から、各地域の寺院の相違を明らかにする。さらに、寺院で生活してきた 1 人の僧侶としての立場から内モンゴルにおけるチベット仏教寺院のバリニの現状、およびその信仰形態の変化や意義について検討してみたい。

【キーワード】 チベット仏教、内モンゴル、バリニ、チャム

### A Comparative Study of Balin Ceremony in Tibetan Buddhism

—— Illustrated by Dazhao Monastery in Inner Monogolia ——

**Abstract :** In Tibetan Buddhism there are plenty of Buddhist ceremonies. And in these ceremonies, the Buddha's enlightenments to believers are conveyed through the offerings, the sutra and the physical movements. Balin is one of the offerings, and its making has strict requirements. As the biggest ceremony in Gelug, every year Monlam Chenmo (the Great Prayer Festival) attracts

a great many believers taking part in. The Balin in Monlam Chenmo is called Dharma-king Balin. However, with time flying many traditions of Buddhist ceremonies have changed and missed in Inner Mongolia, as well as Monlam Chenmo and the making of Balin.

Balin is an offering in Buddhist ceremonies of Esoteric Buddhist, only the lamas who went through Buddhist retreat can make it. Therefore only a few people can research it from the interior of Buddhism. The writer used to be a lama in Dazhao monastery for 12 years, and was honorable to come into Balin. In order to have a comprehensive understanding with Balin and find out the changes in the modern society, the writer focusing on Dharma-king Balin interviewed 6 monasteries in Inner Mongolia, Peking, Qinghai province and Tibet, took part in the local Monlam Chenmo, consulted the local senior lamas about the Balin knowledge and gathered plenty of materials. The writer found there are a great deal of difference among the 6 monasteries. By this paper, the writer hopes to provide humble effort to revive the Buddhist tradition by stating clearly the changes of Balin in the reviving process and the current situation of Balin.

This paper consists of five chapters.

Chapter one introduces the geography areas and the monasteries of the research.

Chapter two talks about the Balin in four parts. The first part states the definition and origin of Balin. The second part states its form and the types. The third part introduces materials of Balin. And the fourth part introduces how the Balin is made.

Chapter three portrays the ceremony of Dharma-king Balin during Monlam Chenmo. It contains three sections which is the definition of the Dharma-king Balin, the origin of the Dharma-king Balin, and the program and details of the Monlam Chenmo.

In Chapter four, the writer compared the Dharma-king Balin among 6 monasteries and explicates the Dharma-king Balin of Dazhao Monasteries.

Chapter five analysis the significances and roles of Dharma-king Balin in the three aspects: the folklore, Kalpa (the Buddhist sutra of the ritual procedure) and literatures.

**Keywords :** Tibetan Buddhism Inner Mongolia Balin Cham

## はじめに

チベット仏教の大きな法会の1つに祈願大法会というものがある。祈願大法会において重要な儀礼にチャム儀礼とバリン儀礼がある。筆者は今まで、チャム儀礼を対象に研究を行ってきた。この取り組みについては、2012年度に神奈川大学非文字資料研究センターより「チベット仏教寺院における仮面芸能（チャム）の比較研究」という研究課題で奨学金を受け、チャムのフィールド調査を行い、その成果を発表した。本研究はこれを基礎として、チャム儀礼と関連の深いバリン儀礼について分析を行いたい。中でも、チェージャル・バリンというバリン儀礼に注目する。

本稿で述べるチェージャル・バリン (ཆེན་ཇམ་པ་འཇེན་པོ་) (供物) とチャム (འཇམ་པོ་) (仮面舞踊) は密教の三密法<sup>(1)</sup>にモノと身体技法を組み合わせた密宗法会で最大の儀礼である。また、チェージャル・バリンとチャムはゲルク派寺院の密宗の本尊であるヤマーンタカ (大威徳明王、ཡམ་ཏ་མཁའ་མཁའ་པོ་) の修法と関連がある。例えば、この儀礼を行う場合、ラマ僧はチェージャル・バリンに対応する経を念誦する前に、まずその日の朝からヤマーンタカの経を念誦しながら本尊や護法神を観想<sup>(2)</sup>しなければならない。さらに、チェージャル・バリンの製作者や儀礼を行う担当者は、必ず閉関修行で本尊の観想<sup>(3)</sup>を行う。

バリン儀礼関係の先行研究には片山一良（1974；1975）、森雅秀（1994）、黄勇（2004）、官却加布（2011）、南拉太（2015）らの成果がある。これらの研究は古代インドのバリ（バリン）儀礼の意味や歴史、チベットのドルマ（バリン）の芸術的側面などの視点から研究されている。しかし、現在までモンゴルのバリン儀礼に対する研究はまだ筆者の知る限りではなされていないが、ドルマについての研究も十分とは言えない。森雅秀はインド密教の儀礼世界をまとめた著作においてバリ（バリン）儀礼を紹介している。森の研究は、現代のネパールとチベットで行われているバリン儀礼とグリヒヤースートラ（grhya-sūtras）の時代の文献とを比較対照しながら、バリン儀礼の性格や機能を見出そうとしている。特にインド後期密教を代表する学僧アバヤーカラグプタ（Abhayākara Gupta）の著作である『ヴァジュラーヴァリー』（Vajrāvalī）を取り上げているが、バリン儀礼の具体的な意義は述べられていない（森 2011：136-166）。

中国におけるバリン儀礼に関する研究は、21 世紀に入って始まった。しかし、現在までの学位論文や関連著作は、チベットのドルマ供物についての簡単な紹介にとどまり、モンゴルのバリン儀礼についての研究は 1 つもない。例えば、黄勇の『拉萨尼寺梵唄——阿尼倉空宗教儀軌供品研究』（2004）はチベットのサラ市における倉空寺のドルマ供物を考察し、製作状況や分類などを簡単に紹介している。チベット族の官却加布は修士学位論文「藏族 “朵（朶）瑪” 一詞研究」（2011）の中で、「ドルマ」という語の起源を紹介し、ボン教とその他の教派を比較して、ドルマの持つ芸術的価値や工芸的な技巧について論及した。南拉太は修士学位論文「藏傳佛教 “朵（朶）瑪” 祭祀的民族志研究」（2015）で青海省の托勒寺の事例を紹介している。南拉太は、民俗学の視点から一般のドルマの素材や使用方法などを考察し、表層的な視点からドルマを紹介し、ドルマをチベット族特有の文化現象や芸術的価値であると指摘している。このようなバリン儀礼に関する研究は、チベット族の文化現象や芸術へのアプローチ、チベット地域社会におけるドルマの歴史・製作方法・種類・役割などについて論述しているが、あくまで寺院外部の視点からの分析にとどまっている。また、ゲルク派寺院のドルマを取り上げて論述しているが、分析や考察は不足している。特に、内モンゴルのチベット仏教寺院におけるバリン儀礼についてはドルマの要素をふまえた供物の内容の詳細な分析、バリン儀礼に関する文献記述の分析、チベット仏教の「バリン」という語の使用に関する考察は、管見の限り行われていない。

現在、バリンの種類・形態・製作方法、およびバリンの素材は、教派や地域により大きく異なっている。さらにバリンの性格や役割は同じ教派においてもバリンの種類と形態の相違により、儀礼の性格や役割、あるいは象徴する意味も変わる。そのため、チベット仏教においてバリン儀礼の対象となる諸仏、諸神、諸菩薩、あるいは諸悪鬼、悪魔、精霊などの性格によりバリンの形態や色などにも差異がある。このような状況下において、バリンの研究を再検討することの意義は大きいと思われる。

本稿では、まず、内モンゴル地域と青海の地域とのゲルク派寺院におけるチェージャル・バリンの比較研究によって、悪魔・悪鬼などを祓う法会に関する供物は何かという問題を再考察したい。そして、チェージャル・バリン儀礼の供物に関するラマ僧からの聞き取り調査した結果と、さらに筆者がラマ僧として経験した寺院の内部的観点、研究者として報告する外部的観点の 2 つの角度から再考察を試みる。

筆者の把握する限りでも、バリンはさまざまな種類が伝承されているが、本稿ではそのすべてを分

析するわけではない。主に内モンゴル自治区のフフホト市地域のイック・ジョー（寺）で行われるチェージャル・バリン儀礼の事例を分析する。また、フフホト市地域におけるチベット仏教寺院のチェージャル・バリン儀礼の事例から、各地域の寺院の相違を明らかにする。さらに、寺院で生活してきた1人の僧侶としての立場から、内モンゴルにおけるチベット仏教寺院のバリンの現状、およびその信仰形態の変化や意義について検討してみたい。

## I 調査地域と寺院の概説

### (1) 調査地域

本稿では、主に内モンゴル自治区のイック・ジョー（寺）を中心に、近年調査した北京、甘粛省の甘南チベット族自治州夏河県、青海省の黄南チベット族自治州の同仁県、西寧の郊外の湟中県、およびチベット自治区ラサ市やサムドゥブツェ区（བསམ་དུབ་རྩེ་ཁུངས་, 桑珠孜）などの寺院の内部資料を基に、チベット仏教寺院のチェージャル・バリンの現状などを考察する。



地図1 調査地域

(注：網かけの部分は中国で調査した範囲である。2016年筆者作成)

#### ① フフホト市のチベット仏教寺院

モンゴル族はシャーマニズムを信奉していたが、13世紀半ば頃にはモンゴル族の上層部ではチベ

ット仏教のサキャ派 (བཀའ་ལྷན་པ་) とニンマ派 (འདུལ་མཁའ་པ་) が信仰されるようになった。1570 年以降、アルタン・ハン夫妻 (写真 1、2) がチベット仏教のゲルク派 (黄教) を取り入れると、モンゴルトメット部の地域 (現在のフフホト市) からモンゴル全地域に広く伝わった。明代後期から清代中期にかけて、チベット仏教のゲルク派はモンゴル地域において勢力の拡大が見られた (橋吉 2008 : 42、根敦阿斯尔 2014 : 384)。

内モンゴル自治区フフホト市では明代から解放以前まで、87 カ所の寺院があった、故に「召城」(寺の町) と呼ばれた。しかし、この多数の寺院は文化大革命の時期に破壊された。破壊の程度がそれほど深刻でなかった寺院は、現在のイック・ジョー (寺) とシレート・ジョー (寺) であった。他の寺については破壊の程度が極めて深刻で寺院の建物は半分も残らなかったが、現在では新寺院として復元されつつある (根敦阿斯尔 2014 : 386)。

さらにラマ僧は政治運動の期間中に思想改造を受けたり、あるいはその最中に死亡したりしている。また、思想改造を受けたラマ僧たちは、その後、俗人になって一般企業に就職することもあった。その上、各寺院の各種の経典は焼却されたため、寺院も継承者が少なくなった中で文化大革命の 10 年間、寺院で各儀礼や法事の宗教性について語ることすら禁じられていた (根敦阿斯尔 2014 : 384)。

その後、1985 年になると、内モンゴル宗教会議により「ラマ僧を育成訓練するクラス」が提起され、1987 年 6 月 1 日、「内モンゴル仏教協会のラマ僧を育成訓練するクラス」が成立した。同年、各地域の高等学校からモンゴル族の 40 名の若者が募集され、ラマ僧になった (徳勒格 1998 : 780-781)。このような状況は、内モンゴルのチベット仏教寺院だけでなく、中国におけるすべての寺院においても、同じような動きを見ることができる。



写真 1 アルタン・ハン首領が仏法を聞く壁画  
(2011 年旧暦 6 月筆者撮影)



写真 2 アルタン・ハンの妻 (名前は三娘子) が仏法を聞く壁画  
(2011 年旧暦 6 月筆者撮影)

## ② イック・ジョー (寺) の概要

イック・ジョー (寺) は、1579 (明朝万暦七) 年に、内モンゴルトメット (土默特) 部落の首領アルタン・ハンによって建設された。このイック・ジョーは、現在フフホト市内の旧城、玉泉区大南街の南部にある (地図 2)。

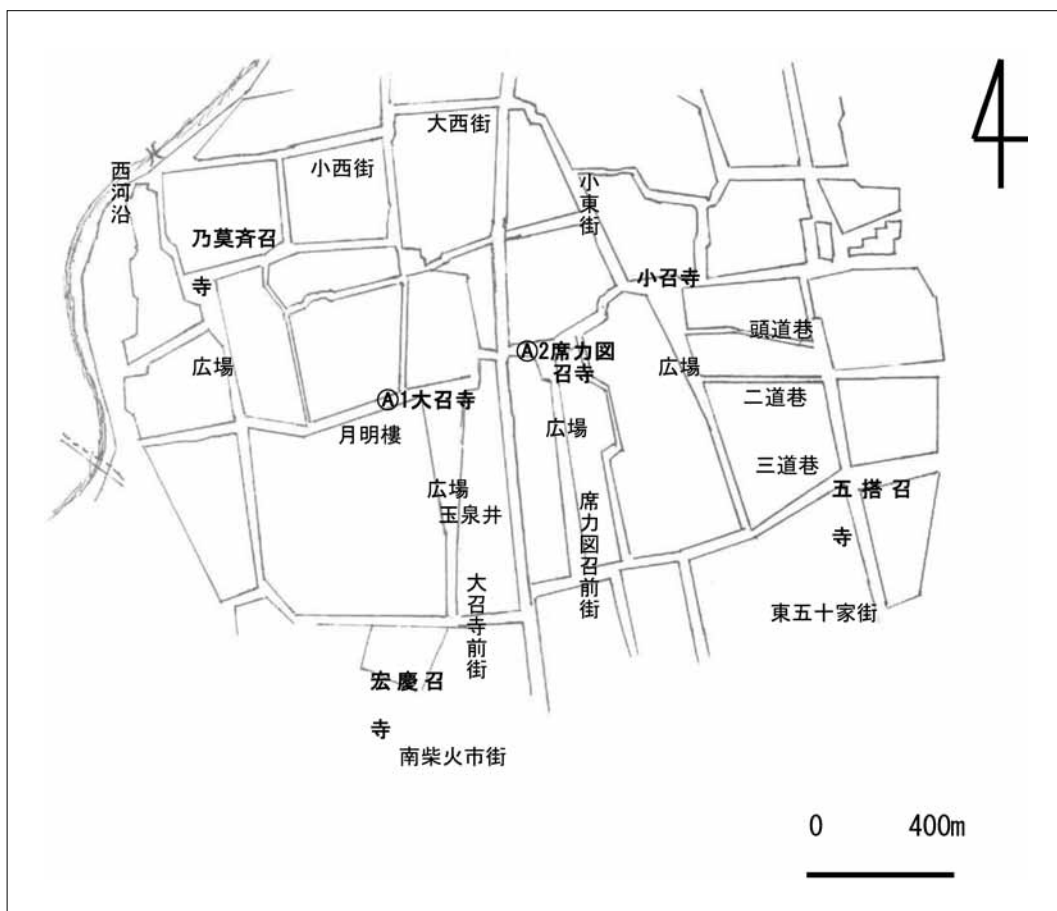
イック・ジョーという名称はモンゴル語であり、イック (eirge) とは「大」の意味で、ジョー



写真3 大召寺の全景

(出典)「大召 国家级重点文物保护单位, 汉名“无量寺”(邦訳: 大召寺は国家級の重点文物保护单位であり、漢名は無量寺である)」

(<http://www.doc88.com/p-973359379216.html>) より 2013 年 12 月 1 日に取得した。



地図2 フフホト市内のイック・ジョー（大召寺）の位置（2013 年筆者作成）

(jun) とは「廟」、「寺」を指し、いわば「大廟」、「大寺」の意味である。漢訳では大召（寺）である。現在、イック・ジョーは437年の歴史を持つチベット仏教寺院である。イック・ジョーは清朝時代の有名な七大召（大きな7ヶ所の寺）の1つであり、最も大きくかつ著名な寺院である。写真3はイック・ジョーの現在の全景である。

イック・ジョー（寺）は仏教聖地というだけでなく、現在では国内外に知られる有名な観光地でもある。寺院建築、真に迫る彫塑、精巧で美しい壁画、浩瀚広大な経巻、チベット語で「チャム」(ཁུམ་) と呼ばれる神秘的な仮面舞踊の儀礼とバリン儀礼、およびモンゴル語で「マニウリル」と呼ばれる広大なマニ法会（漢語で鍊丹会という）、仏教音楽などが独特な寺院文化を構成している。そのため現在、フフホト市のイック・ジョーは2006年に中国政府により「全国重点文物保护单位」に指定<sup>(5)</sup>されていた。さらに現在も同市のチベット仏教文化の中心となっている（根敦阿斯尔 2011: 153）。

## (2) 調査した寺院

本稿の対象とする地域名と寺院は、下記の各地域のチベット仏教のゲルク派寺院である。

- A 内モンゴル自治区——「中国内モンゴル自治区のフフホト市におけるイック・ジョー（寺）とシレート・ジョー（寺）の2つの寺院を主な調査対象とする」
  - ① イック・ジョー（大召寺）
  - ② シレート・ジョー（席力图召寺）
- B 甘肅省——「甘肅省の甘南チベット族自治州夏河県のラブラン寺を指す」
  - ① ラブラン寺 (ལྷ་བླ་མ་དགྲ་ལྷ་, 拉卜楞寺)
- C 青海省——「黄南チベット族自治州同仁県のロンウォ・ゴンパ（隆務寺）や湟中県クンブム・チャムパーリン寺（塔尔寺）を指す」
  - ① ロンウォ寺 (རྩེ་ལོ་མ་དགྲ་ལྷ་, 隆務寺)
  - ② クンブム・チャムパーリン寺 (ལྷ་ལྷ་མ་ཕུ་མ་ཕུ་ལྷ་, 塔尔寺)
- D チベット自治区——「拉萨市のラモチャ寺（小昭寺）とトゥルナン寺（大昭寺）を指す」
  - ① ラモチャ寺 (ར་མོ་ཆེ་དགྲ་ལྷ་) は中国語では小昭寺と称する。
  - ② トゥルナン寺 (ཁྲི་ཁང་) は中国語では大昭寺と称する。
- E 北京市——雍和宮

## II チェージャル・バリンの形態

バリン (Balin、བཤེན་) は、チベット仏教の特徴的な供物儀礼である。ハダカムギ粉を中心に練って作った「バリン」と呼ばれる供物を、諸仏、諸神、諸菩薩、あるいは諸悪鬼、精霊などに供えて、息災、降伏、呪法で諸悪魔を調伏する法要中の献供儀礼である。

### (1) バリンの語義とその由来

#### ① バリンの語義

「バリン」という語はモンゴル語であり、主に麦粉を練って作った寺院の供物を指す言葉である。

地域により「ビェリン」(Bailin)や「バリ」(Bali)ともいう。また、ハンガリーのエドヴェシュ・ロランド大学の研究者であるメイジャー (Majer, Z) とテレキ (Teleki, K) は、外モンゴルにおける伝統的モンゴルチャム舞踊をまとめた論文において、バリンという発音を書いている (Majer, Z & Teleki, K. 2014 : 27)。

バリンについて、ジャムヤン・ショトバ活仏<sup>(6)</sup> (ཇམ་པ་ཡན་ཤོ་ཐབ་ཁུ་བླ་མ་པུ་ཐ་མ་ལོ་པ་ལྷ་མོ་) は『གཏོར་མའི་རྩམ་བཤད་རྒྱལ་བའི་བདེ་ལམ་གཞུང་དོན་རབ་གསལ་ཞེས་བྱ་བ་བཞུགས་སོ』という經典文献で、バリンはサンスクリット語においてバリン (བའི) やバリ (བའི) と呼ばれ、チベット語でドルマ (གཏོར་མ) と訳すと記している。ドルマ (གཏོར་མ) は『藏漢大辞書』によると、単なる「由糴粳捏成用以供神施鬼的食品丸子」(筆者翻訳：ハダカムギ粉を練って作った供神や施鬼の丸団子や食子)の意味である (張怡孙 (蓀) 2008 : 1051)。

バイアー (Beyer, S) はチベット仏教におけるターラーの信仰形態をまとめた著作において、バリン儀礼を紹介している。バリンはチベット語では「ドルマ」と訳されるが、現在ではドルマは色の付いた小麦粉やバターで作った特殊な形態の供物を指すものである (Beyer, S. 1978 : 165)。

上述のような「バリン」や「バリ」、あるいは「ビェリン」の語はドルマと同一語と考えられる。つまり、食物を中心とした供物を特定の神仏に供える儀礼であるバリンは、サンスクリット語からモンゴル語への音訳であるが、チベット語ではドルマと訳されているもの、と考えられる。

## ② バリンの由来

片山一良のインドとスリランカ地方に見られるバリ儀礼についての研究によると、「バリ」(バリン)の語は紀元前10世紀頃の『リグ・ヴェーダ』(Rg-veda)や『アタルヴァ・ヴェーダ』(Atharva-veda)の中に見られるが、この場合はまず神に対する「供物」や「貢ぎ物」というものを指していた (片山 1974 : 81)。そして、各種の神、仏などに供える儀礼行為としてのバリンは、インドのサンスクリット語の学者であるカネー氏 (Kane, P. V) によると、インドの『グリヒヤーストラ』(grhya-sūtras)の中においてしばしば見られたという (Kane, P. V. 1974 : 745-748)。

これに対して、森のインド密教の儀礼世界をまとめた著作においては、バリ (バリン)の語は『リグ・ヴェーダ』(Rg-veda)のサンヒター<sup>(7)</sup> (Samhita)にすでに現れ、供物儀礼としてのバリ (バリン)も「グリヒヤーストラ」(grhya-sūtras)の時代にはすでに成立していたとされる (森 2011 : 137)。さらに、森は、『ヴァジュラーヴァリー』(Vajrāvali)という文献から、バリ (バリン)儀礼は、「およそ12世紀初頭に実際にインドで行われていたものであるが、インド密教の伝統を受け継いだチベットやネパールでも、「バリ」(Bali)の名で呼ばれる儀式が、現在でも行われている」と述べている (森 2011 : 158)。

## (2) バリンの形態と種類

### ① バリンの形態

バリンの形態は、一般的に高さが15センチぐらいの円錐形<sup>すい</sup>である (写真5、6)。一番高いものは数メートルの高さの三角錐である (写真20、21、23、24、25)。円錐形や三角形あるいは円形などを組み合わせた非常に複雑な形態をしている (写真5)。チベット地域における寺院のバリンは、ハダカムギ粉を練ってさまざまな形態に作られており、法要に不可欠な供物で、主に神仏に供え、悪鬼や

悪魔などに対しての施し物である。チベットや内モンゴル、モンゴル国だけでなく、インドやネパールなどの寺院でも作られている。しかし、バリンの形態や種類に関して、全体を詳しく捉えることは非常に難しいと思われる。



写真4 ラモチャ寺のバリン  
(2015年旧暦9月筆者撮影)



写真5 ロンウォ寺のミロクを対象  
としたバリン  
(2015年旧暦1月筆者撮影)



写真6 イック・ジョー（寺）の旧  
暦6月法会のバリン  
(2012年旧暦6月8日筆者撮影)

## ② バリンの種類

バリンの種類については表面の色から、主に白色（ハダカムギ粉の自然的な色）と赤色（紫草の汁で塗った赤色）の2種類に分類される。チベット語ではガドル（དགའ་གདུང）とマドル（དམར་གདུང）とも称する（写真4、5、6）。第1種のガドルは、主にハダカムギ粉を中心に作られ、色がなく、素食的素材を指している（写真6）。第2種のマドルは、主にハダカムギ粉を中心に作られ、血液のような色の素材を塗り、密宗的な葷食<sup>くん</sup>を指している。これ以外の種類には、特別な黒色のバリンもあり、これは悪鬼や悪魔などを対象とするものである。

バリンに関する種類については、官却加布の修士学位論文「蔵族 “朵（朵）瑪” 一詞研究」が、チベット語で「ドルマ」というモノの種類を紹介している。官却の示すドルマの種類は、ゲルク派の開祖ツォンカバ大師の直弟子であるダライ・ラマ1世ゲンドゥン・ドゥプパ（དཀོན་ལའྭ་གྲུབ་པ། 1391年～1474年）の著作である『གཏོར་མའི་ཆོག་དོན་རབ་གསལ།』（筆者翻訳：ドルマの内容明解）の中で示されている。官却氏は、ゲンドゥン・ドゥプパ尊者が、ドルマを大きく6種類に分けて説いたが、文献には、<sup>ཕྱི་གཏོར་མ་</sup>（外供）<sup>ནང་གཏོར་མ་</sup>（内供）<sup>གསང་བའི་གཏོར་མ་</sup>（秘密供）<sup>བསམ་གཏན་གྱི་གཏོར་མ་</sup>（禅定供）<sup>མཚན་པའི་གཏོར་མ་</sup>（象徴供）の5種類しか見られないと述べている（官却加布 2011：34）。

ジャムヤン・ショトバ活仏（ལུན་མཁུན་འཇམ་དབྱངས་བཞུགས་པ།）の『གཏོར་མའི་རྩམ་བཤའ་རྩལ་བའི་བདེ་ལམ་གཞུང་དོན་རབ་གསལ་ཞེས་བྱ་བ་བཞུགས་སོ།』という經典文献では、「<sup>བཞི་པ་གཏོར་མའི་དབྱེ་བ་ནི།</sup> <sup>གཏོར་མ་ལ་ཕྱི་གཏོར་མ་དང་།</sup> <sup>ནང་གཏོར་མ་དང་།</sup> <sup>གསང་བའི་གཏོར་མ་དང་།</sup> <sup>སྤྱན་མེད་པའི་གཏོར་མ་དང་།</sup> <sup>བཞི་པ་ཡོད་དེ།</sup> <sup>ཕྱག་རྒྱུ་གསུམ་རྩམ་གྱི་གཏོར་ཆོག་ལས།</sup> <sup>གསང་བ་སྤྱན་མེད་མཚན་གྱི་འདོད་ཀྱི་ནང་ཆོན་མོང་ཞེས་པར་བྱ།</sup> <sup>ཞེས་སོ།</sup>」バリンの種類を、①外供のドルマ（<sup>ཕྱི་གཏོར་མ་</sup>）、②内供のドルマ（<sup>ནང་གཏོར་མ་</sup>）、③秘密供のドルマ（<sup>གསང་བའི་གཏོར་མ་</sup>）、④無上供のドルマ（<sup>སྤྱན་མེད་གཏོར་མ་</sup>）などの4種類に区別して詳しく記述している。

さらに、チベトラサのダンバー・ラマ僧は、①外（<sup>ཕྱི་གཏོར་མ་</sup>）、②内（<sup>ནང་གཏོར་མ་</sup>）、③密（<sup>གསང་གཏོར་མ་</sup>）、④空（<sup>དེ་མེད་ཀྱི་མེད་</sup>）、⑤大（<sup>གཏོར་མ་ཆོག་པོ་དང་ལྡན་པར་གསུངས་པ།</sup>）などの5種類が木の根のようにあり、その後、またその1つずつから根の小枝のように数多く増えていく。このようにバリンの種類は形成されると述べている。

上述の通り、バリンの分類はゲルク派の尊者や活仏が著した經典文献、およびラマ僧の口述伝承の中での分類である。しかし、バリンの分類方式としては、多くの先行研究にも差異が見られる。例え

ば、バイアー (Beyer, S) は、ドルマについて、本尊、護法尊、土地の神、六道の衆生の4つの範疇に分類されると述べている (Beyer, S 1978:165)。この分類は内モンゴル自治区フフホト市における寺院のバリンの対象である仏、菩薩、本尊護法、土地の神、および六道の衆生などに対応する。

### (3) バリンの製作素材

バリンの主要素材はハダカムギの粉であるが、麦粉の種類は地域によって異なってくる。調査で分かった麦粉の種類は、チベットの特産のハダカムギ粉と内モンゴルの莜面 (ユウメン) 粉の2つである。これ以外には、木の素材もある。

#### ① ハダカムギ

ハダカムギ (*Hordeum vulgare* L. var. *nudum* Hook. f.) はイネ科の穀物の1つである。ハダカムギは、チベット語で「ネー」(ལྷུ་ལྷུ་) であり、中国語では「青稞 (セイカ)<sup>(8)</sup>」と訳される (張怡荪 (蓀) 2008:1523)。日本語では「ハダカムギ」、「オオムギ」と呼ばれる。チベット、青海、甘肅、および雲南などのチベット族がいる地区を中心に広く主食用として栽培される穀物である (郭本兆 1987:701)。

ハダカムギは、ほかの穀物より成長が早く、収穫までにかかる日数も短い上、乾燥に強く耐寒性があり、寒冷気候の劣悪な環境においても成長できるなど適応性が高い (姚曉華他 2013:81、張宗显他 2004:14)。そのため、小麦の栽培に不適なチベットの寒冷地において「日常生活の主食」として栽培されている。

ハダカムギを炒って粉碎した粉にバターと砂糖、および茶水を加えてこねて団子状にしたものは「ツァンパ」(ཇམ་པ་) を呼ばれ、肉類や乳類と並び、チベットの伝統的な主食となっている。チベット地区の伝統的な食生活の中で、ハダカムギは最も大事な食糧の1つであると言える (写真8)。

さらに、チベット地区ではハダカムギの種子の由来に関係する物語、伝説、歌謡などが広く伝わっている。その内容の多くは犬、鳥、鶴などの動物によって、ハダカムギの種子が伝播することに関するものである。最も代表的なものとしては『チベット族の文学史』の中の「ハダカムギの種子の由来」において、「ハダカムギがあるため、人間の生活は本当に甘美である。一日三食の心配もなく、いつもハダカムギの酒がある。故に、人々は雲雀に感謝し、大衆は一粒のハダカムギさえ大事にする」という詩が詠われているほどである。

「人間有了青稞糧，日子過得真甜美。一日三餐不愁吃，頓頓還有青稞酒。人人感謝雲雀鳥，萬眾珍愛青稞粒」を参照。

チベット族がハダカムギ粉で作ったツァンパを食べられるようになった原因は、「神様が鳥を派遣してハダカムギの種子を送り、チベットの厳しい寒さの地域に真珠や黄金に似ている食糧ができたためである」と、チベットの物語は示している。このような物語から、ハダカムギがいかにチベット族にとって重要であるか、が分かる。ラマ僧たちが、なぜハダカムギ粉を選び使うかという理由も分かるであろう。チベット族の人々は、敬虔な態度で神仏を信じ、故に信者たちが一番大事なものと感じ

ているハダカムギを神仏に供え、奉ずるのである。

## ② 莜面（ユウメン）

莜面（Avena nuda）は中国語であり、主に内モンゴルの中西部を中心に、少量栽培されているイネ科の穀物の1種である。日本語で「カラスムギ（烏麦）」と呼び、ハダカムギと同じように<sup>えんばく</sup>燕麦属の1つである（賽音塔娜ら 2004：145）。

作り方は、まず莜麦（ユウマイ）を洗って乾燥した後、炒って粉碎した「莜麦粉」という粉を用いて日本の蕎麦のように調理する。こねた莜面を手でさまざまな形に製麺して蒸し、<sup>きゅうり</sup>胡瓜やラディッシュなどの野菜と一緒に冷たいつゆに付けて食べたり、温かい羊肉のスープ（羊の骨や肉で出汁を取ったスープ）に入れて食べたりするのが一般的である。イメージとしては日本の蕎麦に似ている（写真7）。

莜面は内モンゴル西部地区で「山薬」<sup>(9)</sup>（じゃがいも）、「大皮袄」（タイピーアォ）と並んで三宝と呼ばれる（蒙瑞萍 2013：16）。その三宝の中で莜面は特に有名であり、莜面に関係することわざ、民間演劇、民間信仰が広く伝わっている。例えば、莜面を授かるとその家が豊かになるということわざや、伝統的な習慣にフフホト市は旧暦の正月10日（正月初十）には、どの家でも莜面を食べるというものがある。それは、「十指儿」という祭日となっている。この祭日を行う際、莜面を用いて竜の形になるように両手で成型する。竜の体の上に12個穴をこねて作り、それが、12カ月を象徴している。そして、蒸籠で蒸した後穴の中の水を見る。その水は「雨水」と呼ばれ、新年の毎月の降雨量の予兆を示しているという。このように、莜面はフフホト地区の人々の生活と深くかかわっていることが分かる。これが、ハダカムギに代わってバリンの素材になる理由の1つと考えられる。

また、その理由はほかにもある。フフホト地域において、ハダカムギは「蘭麦（ランメ）」と呼ばれている。筆者がフフホト市の近郊の農民たちに聞いた話では、ハダカムギの味を好まないため、馬草として少し栽培されているだけで、食糧になるのは極めて少ないという。そのため、寺院でハダカムギの粉を入手するのが難しく、バリンを作るために使われることは少なくなっている。

内モンゴル地区は温帯の大陸性気候であるため、小麦、蕎麦、莜面など多量の農作物を栽培することに適し、民衆がこれらの農作物を好んでいることも莜面がバリンの素材になる理由として挙げられる。特に、莜面は内モンゴル地区の特産物の1つである。莜面は、内モンゴルの中西部を中心に生育する燕麦の1種であり、民衆が好きなものである。その莜面粉は強い粘り気があって成型もしやす



写真7 内モンゴルの莜面  
(2015年旧暦8月筆者撮影)



写真8 チベット地区のツァンパ  
(2015年旧暦8月筆者撮影)

く、期間をかけて乾かした後にも裂けないという特徴を持っているため、バリンの製作素材に選ばれているのである。それでも、やはりハダカムギ粉はその他の供物の製作に使われている。寺院における年配のラマ僧は、少年時代にチベット地区で学習し、その日常生活の影響を深く受けているため、ハダカムギを炒めて、麵粉をつぶして、バターと白砂糖を入れてツェンパというものを作り、食用にするのである。つまり、食用にできる供物を製作するために、ラマ僧たちはハダカムギ粉を選んでいたのである。

### ③木材への変化

木で製作したバリンは、近年チベット地区の寺院に対して行った調査では、まだ見ることができない。しかし、内モンゴルの地域では寺院の殿堂を装飾するものとして存在している。例えば、フフホト市のイック・ジョー（寺）とシレート・ジョー（寺）では殿堂の中の仏像の前を装飾するため、約80センチの大きなサイズの円錐形と約15センチの小さなサイズの塔形のバリンが安置されている（写真9～10）。この現状について年配のラマ僧にインタビューしたところ、戦後から1987年まで寺院の収入は減少し、僧侶たちの日常生活は非常に困難であった。このような中で、本来の殿堂の様式のようにバリンを復元するため、1987年からハダカムギに代わって木を使って作ったという。この木製のバリンが今でも置かれている。

また筆者は72歳のダワーラマ僧に次のような質問をした。今の寺院は観光客からの収入によりとても裕福な暮らしになったが、それにも関わらずまだ木の素材を使っているのはなぜか。また、なぜ過去のように麦粉を使って作ることをしないのか。

ラマ僧の答えは、次のようなものである。若いラマ僧たちは法会の時には麦粉で作るが、仏像を対象として日常的に供えるバリンでは、作らないことが習慣になった。さらに寺院の管理委員会の責任者は麦粉のバリンは維持管理に手間がかかるという考えを持っているので、なかなか過去のように復元することは難しい。このような状況で、木製のバリンの維持管理が簡単で便利であるため、また費用を節約するため、多くの寺院が木製のバリンを使っているという。このような変化は、1980年以降からである。

さらに現在還俗した巴雅尔（俗名は韓長青）の例で言えば、1987年にイック・ジョー（寺）で出家し、1980年以来最初の新学僧になった。この時、彼は14歳である。寺院に入ってから、年配のラマ僧からさまざまな法会用のバリンを製作する方法を勉強していた。しかし、当時バリンを作ること



写真9 イック・ジョーの木製のバリンの装飾  
(2015年旧暦8月26日筆者撮影)



写真10 シレート・ジョーの木製のバリン  
(2015年旧暦8月26日筆者撮影)



写真11 イック・ジョーの油麦を製作したバリン  
(2013年旧暦1月14日筆者撮影)

ができるラマ僧が少ないため、主にシレートラマ（首席僧）が彼に教え、また彼がその他の新学僧に教えていたという。そのため、現在わずかに残った種類は、年配のラマ僧たちの伝統的な作り方を思いついたものである。このような状況を見ると、フフホト市における寺院のバリンの作り方や素材は、チベット地区のようなバリンのそれと、大きく異なっていることが分かる。

#### ④ その他の素材

バリンを作る時に加えるその他の素材については、上述したような麦粉以外に、さまざまな素材を使う。ネビスキ（Nebewsky, R. D）の *Oracles and Demons of Tibet: The Cult and Iconography of the Tibetan Protective Deities* の中で、護法神や呪術の対象であるドルマの素材がまとめて紹介されている。ドルマのその他の素材は、血、酒、水、ミルク、薬などを面粉に入れてからもんで、木板で作ることが述べられている。さらに、ネビスキは、特に、呪術の対象としてのドルマで使う血や酒、あるいは水の種類について以下のように紹介している。

①血は、死んだ人の血、ハンセン病患者の血、寡婦の月経、妓女の月経、戦闘の中で殺された若い人の血、健康的な男性の血、8歳の男子の血、近親相姦の生んだ子供の死体の血、あるいは、獣の血などである。

②酒は、ハダカムギの酒、ワイン、米酒、白酒、馬乳酒などである。

③水は、普通の水、水の中にサフランを入れた水、地下水 108 メートルの遠い水源から取って来た水、雪山の水、山岩の水、漠地の茶である（Nebewsky, R. D. 1996：343-344）。

図齊（Tucci）『西藏和蒙古的宗教』によると、ゲルク派ではバリン（ドルマ）を作る素材に、ミルク・ハダカムギ粉・チーズ・糖・蜂蜜の糖・蜂蜜とチャンパがあるが、肉とハダカムギの酒は禁止であることが明確に指摘されている。

「与多瑪供同時供奉的食品有奶、青稞、奶酪、（三白）或糖、糖蜜、蜜（三甜）和糌粑。在格魯巴中，肉和青稞酒是禁用的」（図齊 1989：151）。

ネビスキの研究はチベットの神と妖怪を含む研究であるため、上述したような血や酒などについてはボン教から取り上げた可能性がある。筆者が調査した青海省のクンブム・チャムパーリン寺の学僧ジャムソ・ラマから聞いた話によると、血、肉、酒も禁止されているが、他の物に代わって象徴的に行われている。実際、その他の素材は以下の①～⑩のように分類できるが、10種素材と数える伝統もあった。例えば、クンブム・チャムパーリン寺では「①水 ②薬粉 ③氷砂糖 ④赤糖 ⑤蜂蜜 ⑥ミルク ⑦ヨーグルト ⑧バター ⑨五宝（金、銀、真珠、瑪瑙、珊瑚） ⑩紫草」というその他の素材を用いることが調査より明らかになった。このような素材はゲルク派のジャムソ・ラマ僧から聞き取ったものであるが、バリンの対象となる神様の性格により使用する素材は相違がある。詳しくは製作方法で説明する。

#### （4）バリンの製作方法

バリンは種類が非常に多く、具体的な製作方法も異なる。一般的には、ハダカムギを炒めて、面粉

をつぶして、ボールに入れて、少量の薬粉と三甜三白<sup>(11)</sup>（དཀར་གཞུང་མངར་གཞུང་）と浄水でこねる。その後、法事や神仏の対象にさまざまな形をこねて作って、最後にバターで表面を塗る（写真 12、13）。種類によっては紫草（འབྱིམ་）とバターで作った赤い汁を塗った後に、バターで作った花をその表面に飾る。

#### ① 調査で判明した禁忌

さて、バリンを作る際には、いくつかの禁忌がある。青海省におけるロンウォ寺（རྫོང་པོ་དགོན་པ་、隆務寺）の聞思学院の学僧であるゾットツバ僧に聞き取りをした結果、バリンの製作には次の5つの禁忌があるという。その内容については青海省のクンプム・チャムパーリン寺の学僧ジャムソ・ラマに確認した。

- バリンを作る前、ラマ僧は必ず口と手を洗って、布をマスクのようにかける。
- バリンを作る時は、敬虔な心を持って、雑念がないようにする。
- 赤色のバリンを作る時には、バリンの全体を真面目に塗る。
- バリンを作る過程で悪い言葉や恨みごとを言わないようにする。
- 禪定の本性を表すため、バリンの底部を平らにきちんと整える。

上述した禁忌は、筆者が幼年の時に恩師である内モンゴルのイック・ジョー（寺）のザスック・ダーラマ僧（写真 15）からも聞いたことがある。

#### ② チェージャル・バリンの禁忌

チェージャル・バリンでは、上述した5つの禁忌以外に次のような禁忌がある。『དཀར་ཆུ་པ་བསྐྱེད་པའི་དག་བདོན་<sup>(12)</sup>བཀའ་དྲུང་གླེན་འཛིན་ཞེས་བྱ་བ་བཞུགས་སྒྲིག་（筆者翻訳：十六護法供養簡易儀軌經）』（手抄本）によると、大威徳金剛<sup>(13)</sup>（写真 16）の灌頂を受けなければならない、さらに閉関修行を行う必要もあるとされている。しかし、現在の内モンゴルにおける多数の寺院では、僧侶たちはこの2つの修行を行っていない。



写真 12 イック・ジョー（寺）  
の大威徳金剛のバリン  
（2016 年旧暦 1 月 13 日筆者撮影）



写真 13 イック・ジョー（寺）  
のバリンを作る過程  
（2016 年旧暦 1 月 13 日筆者撮影）



写真 14 シレート・ジョー（寺）のチェー  
ジャル・バリンを作る過程  
（2016 年旧暦 1 月 13 日筆者撮影）

### Ⅲ 祈願大法会におけるチェージャル・バリン儀礼

#### (1) チェージャル・バリンの語義

チェージャル・バリン（ཆེ་ཇམ་པ་བའི་）という語はチベット語とサンスクリット語の合成語であり、チベット語ではチェージャル・ドルマ（ཆེ་ཇམ་པ་གྲོ་མ་）と呼ばれている。モンゴル語ではサンスクリット語を

そのまま用いてバリンと言っているが、1981年に北京の雍和宮（寺）に修学した嘉木揚凱朝によると、「中国人は「送崇」と言い、モンゴル語ではソルハヤホウ（sor qayaqu）という。金剛馭魔神舞が始まる前に、三角形の木盤の上に呪いの依り代の人形トルソルを置く」と述べ、モンゴル語のソルハヤホウ、トルソルも記載されているという（嘉木揚凱朝 2004：341）。

また、外モンゴルにおけるチベット仏教寺院は、メイジェー（Majer, Z）とテレキ（Teleki, K）によると、“The Cam dance ends with the ritual burning of the *Sor or Sorin balin* (T. zor) and the *£axar* (T. lcags mkhar)”というソルソリ・バリン（Sor or Sorin balin）を記載している（Majer, Z. 2014：22）。

内モンゴルにおけるチェーガル・バリンの呼称については、中国の各地域により多少異なるものの、一般的に「送鬼（鬼を送る意味である）」「打鬼（鬼を打つ意味である）」「送崇」「送巴令（送バリン：漢語とサンスクリット語の合成語である）」と呼ばれる。例えば、内モンゴルのイック・ジョー（寺）とシレート・ジョー（寺）では「送巴令」（song baling）、「送鬼」と呼ばれ、他の地域（甘粛省・青海省・チベット自治区）においてはチェーガル・ドルマと呼ばれている。そのため、筆者は「チェーガル・バリン」という用語を用いた。

チェーガル（ཇེ་གཤམ་）は、ヒンドゥー教の冥界の主ヤマ神がチベット仏教に取り入れられて密宗の護法神の1つとなったもので、『蔵漢大辞書』（2008）によると、「閻魔」、「閻羅王」、「法王」を指す（張怡孫（孫）2008：832）。法王の呼称は、田中公明によると、「この神が亡者の善悪の業によって厳正な裁きを下すところからきたものである」という内容を記述している（田中 2001：171）。

バリンはⅡ章で述べたように麦粉を中心に練って作った供養物を特定の神・鬼などに供養するものである。チェーガル・バリンは、チェーガル護法神の経呪を念誦する中で行われる。このバリンは、チェーガル護法神の骨のステッキを象徴し、威力がある武器の意味と考えられている（写真17）。



写真15 筆者の恩師であるザスック・ダー  
ラマ僧  
（イック・ジョー寺から収集した1995年  
旧暦6月8日の写真）



写真16 ラブラン寺のダンバ・ラマ僧  
が描かれた大威徳金剛の仏画  
（2015年旧暦9月筆者撮影）

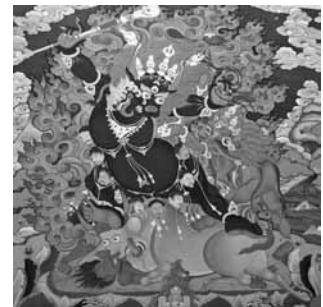


写真17 ラブラン寺のダンバ・ラマ僧が描かれたチェーガルの仏画  
（2015年旧暦9月筆者撮影）

## （2）祈願大法会の由来

祈願大法会はチベット語で「モンラムチャンポ（མོན་ལམ་ཇམ་པོ་）」と呼ばれる。一般的に、内モンゴルにおける各寺院では、1年に2回行われる。祈願大法会は、『至尊宗喀巴大師伝』によると大願法会<sup>(14)</sup>と称し、俗称は「伝召法会」である。

「大愿法会，俗称伝（传）召。西元 1409 作藏歴（历）正月，宗喀巴为了紀（纪）念释迦牟尼，在拉萨大昭寺里唱（倡）建了一次讲论佛经，発（发）愿祈禱的宗教法会，毎年挙（举）行，成為（为）常例」（法王周加巷 1994：65）を参照。

1409 年、チベット暦の正月に、ゲルク派（དགེ་ལཱ་གྲུ་པ།）の開祖ツォンカパ（ཙོང་ཁ་པ། 1357～1419）<sup>(15)</sup> 大師が、チベットのラサ市における大昭寺で釈迦牟尼を記念して祈願大法会を発起したという。祈願大法会はチベット語では「モンラムチェンポ」と呼ばれ、中国語で祈願大法会を意味する（張怡孫（孫）2008：2175）。

この祈願大法会をはじめとして、「モンラムチェンポ」はゲルク派の各寺院にとって正月の重要な法会となった。ツォンカパ大師が円寂後、19 年ほど中断したと言われているが、ダライ・ラマ 2 世 ゲンドゥウ・キャムツォ（དཀོན་འདུན་ཆུ་མཚོ། 1475～1542）が、この祈願大法会を復興した。また、ダライ・ラマ 5 世（དཀོན་འདུན་མཆོག་མཚོ། 1617～1682）の時代になると、祈願大法会がチベット歴の正月 3 日から 24 日まで行われるようになった。さらに、この時代から法会の際、仏典を弁論する形式で、チベット仏教のゲシェー（དཀོན་ཤེས།）という学位を選出する試験制度が決められた。こうして、各地域のゲルク派の寺院では毎年の正月に「モンラムチェンポ」という盛大な法会を行うのが慣例となった（丹迥冉納班雜他 1997：204-205、嘉木揚凱朝 2009：70）。

『至尊宗喀巴大師伝』によると、ツォンカパ大師が祈願大法会を創立したため、漢族、チベット族、モンゴル族などの諸四方に仏縁を持つ人々がチベット仏教聖地へ来て仏法に帰依していたという（法王周加巷 1994：41）。現在も内モンゴルやチベットの各寺院では正月に祈願大法会が行われている。例えば、フフホト市におけるイック・ジョー（寺）とシレート・ジョー（寺）では、毎年旧暦の正月 8 日（初八）から 15 日までと旧暦 6 月 8 日（初八）から 15 日までの 8 日間にかけて、「モンラムチャンポ」を行う。

### （3） 正月の祈願大法会

内モンゴルの正月の祈願大法会では、主にツォンカパ大師により顕宗と密宗の儀軌経の読経が行われる。筆者の恩師であるイック・ジョー（寺）のザスック・ダーラマ僧（写真 15）によると、旧暦の正月 1 日（初一）から 15 日の期間に、釈迦牟尼仏がこの世に現れ、各種の神通力で世界の悪魔を降伏させるという。チベット仏教の教義では、旧暦の正月は神変（不思議なこと）が起こる期間と考えられており、各寺院では盛大な「モンラムチェンポ」と呼ばれる祈願大法会が行われるという。

本稿では、2016 年旧暦正月 8 日から 15 日までの祈願大法会の流れを表 1 にまとめ、その内容を説明する。

上述したように、祈願大法会は 8 日間のうち、8 日から 13 日までの 6 日間は読経だけを行い、14 日には読経し、ほかにチェージャル・バリンの儀礼を行う。最後の日である 15 日には、読経以外に転廟の儀礼やチャム儀礼などを行うのである。チェージャル・バリンは、その諸儀礼の中の 1 つである。チェージャル・バリン儀礼の際、2 人のラマ僧がバリンを持ち上げ、その次に儀式の指導者であるソックチン・ゲフィーラマ（衆僧の戒律や規律などを監視や管理する僧である）により、衆僧が 2 列に並んで大雄宝殿から山門外を出る。途中の菩提過殿でチャム儀礼の踊りを踊ったメンバーが続

表1 2016年に調査したイック・ジョー（寺）の祈願大法会の式次

旧暦正月8日～正月15日までの祈願大法会の内容			
日	時間	詳細な内容	備考
7日	10:30～12:10	大雄宝殿中の法座を北の向きに安置して、その間に整理、掃除する。	
	12:10～15:00	昼休み	
	15:00～17:00	すべての殿堂に果物や花などの供養物を準備する。	
	17:00～18:00	護法神のパリンを供台に供える。	
8日	5:00～6:00	ラマ僧を集めるためにピレー（大型喇叭）と法螺貝を吹く。	2人
	6:00～7:10	『ソオンカバ大師の祈願偈（དམིགས་བརྟེན་）』『帰依経（སྦྱབས་འགྲུབ་）』『三十五仏懺悔経（ལྷུང་བཤགས་བཞུགས་སོ）』『ソオンカバ大師の礼賛偈（དགའ་ལྷན་ལྷ་བརྟེན་）』『八大論師の礼賛偈（མཁའ་མཉམ་མ་）』『三聚経』などを念誦する。	
	7:10～8:00	ミルク茶と月餅を配膳し、『膳食感恩願文（ལྷན་གྲུབ་མཆོད་པ་）』を読経後、食事をする。	朝食
	8:00～12:00	『ジックジットオン（དཔལ་རྒྱུ་འཛིན་གྱི་དབང་བཞུགས་སོ）』『供養曼荼羅（མཛེས་）』などを念誦する。	
	12:00～14:30	昼休み	昼食
	14:30～15:00	ラマ僧を集めるために銅鑼を叩く。	1人
	15:00～17:00	『ソオンカバ大師の祈願偈（དམིགས་བརྟེན་）』『大白傘蓋（གདུགས་དཀར་）』『二十一度母礼賛偈（སྦྱུང་མའི་བརྟེན་པ་བཞུགས་སོ）』『白度母礼賛偈（སྦྱུང་གཤམ་བརྟེན་པ་བཞུགས་སོ）』『般若心経（ཤེས་རབ་སྙིང་པོ）』『マハーカーラの願文（ཐུང་མཛོད་མ་）』などを念誦する。	
9日	★8日とほぼ同じ。		
10日	7:00～8:00	ラマ僧を集めるためにピレー（大型喇叭）と法螺貝を吹く。	2人
	8:00～8:45	『ソオンカバ大師の祈願偈（དམིགས་བརྟེན་）』『帰依経（སྦྱབས་འགྲུབ་）』『三十五仏懺悔経（ལྷུང་བཤགས་བཞུགས་སོ）』『ソオンカバ大師の礼賛偈（དགའ་ལྷན་ལྷ་བརྟེན་）』『八大論師の礼賛偈（མཁའ་མཉམ་མ་）』『三聚経』などを念誦する。	
	8:45～9:10	ミルク茶と月餅を配膳し、『膳食感恩願文（ལྷན་གྲུབ་མཆོད་པ་）』を読経後、食事をする。	朝食
	9:10～11:50	『上師無上供養経（སྤྱུ་མ་མཆོད་པའི་ཚུགས་བཞུགས་སོ）』『二十一度母礼賛偈（སྦྱུང་མའི་བརྟེན་པ་བཞུགས་སོ）』『白度母礼賛偈（སྦྱུང་གཤམ་བརྟེན་པ་བཞུགས་སོ）』『般若心経（ཤེས་རབ་སྙིང་པོ）』『マハーカーラの願文（ཐུང་མཛོད་མ་）』などを念誦する。	
	11:50～15:00	昼休み	昼食
	15:00～17:00	チャム（舞踊）の練習をする。	
11日	★10日とほぼ同じ。		
12日			
13日	7:00～11:00	★10日とほぼ同じ。	
	11:00～12:00	大雄宝殿中の法座を南の向きに戻して、整理、掃除する。	
	12:00～15:00	昼休み	昼食
	14:00～18:30	☆チェージャル・パリンを担当者が製作する。	2人
	15:00～17:00	チャム（舞踊）の練習をする	
	18:30～19:00	☆チェージャル・パリンを大雄宝殿の中に安置する。	2人
14日	5:00～6:00	ラマ僧を集めるためにピレー（大型喇叭）と法螺貝を吹く。	2人
	6:00～7:10	『ソオンカバ大師の祈願偈（དམིགས་བརྟེན་）』『帰依経（སྦྱབས་འགྲུབ་）』『三十五仏懺悔経（ལྷུང་བཤགས་བཞུགས་སོ）』『ソオンカバ大師の礼賛偈（དགའ་ལྷན་ལྷ་བརྟེན་）』『八大論師の礼賛偈（མཁའ་མཉམ་མ་）』『三聚経』などを念誦する。	
	7:10～8:00	ミルク茶と月餅を配膳し、『膳食感恩願文（ལྷན་གྲུབ་མཆོད་པ་）』を読経後、食事をする。	
	8:00～12:30	『大威徳金剛祈願文（འཛིན་གྱི་ཐུང་ལུས་མ་）』『マハガラ（མགོན་པོ་）』『閻魔護法（ཇོ་ཡེ་ཇམ་ལ་, དལ་ཅན་ཚས་ཀྱི་ལྷ་）』『吉祥天母回供（ལྷ་མའི་）』『財宝護法（རྩིས་ཐོས་ལས་པ་）』などを念誦する。	
	12:30～15:00	ラマ僧を集めるために銅鑼を叩く。	1人
	15:00～15:40	☆チェージャル・パリンを送る準備をする。	

	15:40～15:54	☆「密承統部呪」を念誦しながら、安置された大雄宝殿中のチェージャル・バリンを大経堂の前に移動し、その後、『十六護法神簡易祈願偈（དཀའ་སྒྲོལ་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』を念誦する。	
	15:54～16:00	☆チェージャル・バリンを大経堂から菩提過殿前に移動後、「チェージャル」と「ゴンポ」というチャム舞踊を行う。その後、『十六護法神簡易祈願偈（དཀའ་སྒྲོལ་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』を続いて念誦する。	
	16:00～16:15	☆チェージャル・バリンを、チェージャルとゴンポの舞者と一緒に菩提過殿の前から山門前の玉泉井の前に移動する。その後、次第に『十六護法神簡易祈願偈（དཀའ་སྒྲོལ་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』を念誦する。	
	16:15～16:21	☆事前に準備した高く積んだ焚き物に点火し、チェージャル・バリンを火中に投げる。そして、各種の悪魔や悪鬼を祓うため、信者がチェージャル・バリんに供えたハター（モンゴルの長い絹織物）をラマ僧が火の中に一緒に投げ入れる。	
	16:21～16:37	☆チェージャル・バリンを送り終わった後、ラマ僧たちは寺院に戻る。山門の門楣の前でチェージャル・バリんに使った黒い三角形の皿（図2）を逆向きに落として、経呪を誦する。次第に菩提過殿の前で、チェージャル・バリんに挿したもの（傘を象徴する）を事前に準備した1匹の羊の肉に挿してから、最後の『十六護法神簡易祈願偈（དཀའ་སྒྲོལ་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』を誦する。	
	16:37～17:20	大経堂に戻り、『ツォンカパ大師の祈願偈（དཀོན་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『普賢菩薩行願偈（ཕཌས་པཌ་སྐུ་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『道次第の修習偈（ལཱ་ཤུན་ལཱ་ཤུན་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『大白傘蓋（གཤམ་པ་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『二十一度母礼賛偈（མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་ཀྱི་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『白度母礼賛偈（མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་ཀྱི་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『般若心経（ཞེས་པའི་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『マハーカーラの願文偈（མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』などを念誦する。信者のために読経する。	
	17:20～18:00	大雄宝殿中の法座を北の向きに安置して、その間に整理、掃除する。	
15日	6:00～7:00	ラマ僧を集めるためにビレー（大型喇叭）を吹く。	2人
	7:00～8:00	大型釈迦仏のタンカー（仏画）を旗竿に展示する。また他の供物を準備する。	4人
	7:00～7:45	『ツォンカパ大師の祈願偈（དཀོན་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『帰依経（ཐུགས་རྒྱུ་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『三十五仏懺悔経（ཐུགས་རྒྱུ་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『ツォンカパ大師の礼賛偈（དཀོན་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『八大論師の礼賛偈（མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『三聚経』などを念誦する。	
	7:45～8:10	ミルク茶と月餅を配膳し、『膳食感恩願文（ཐུགས་རྒྱུ་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』を読経後、食事をする。	
	8:10～9:00	『上師供養法（ཐུགས་རྒྱུ་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『二十一度母礼賛偈（མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་ཀྱི་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『白度母礼賛偈（མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་ཀྱི་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』『般若心経（ཞེས་པའི་མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』などを念誦する。	
	9:00～11:45	ラマ僧たちが、伝統的な馬車の中に安置した弥勒仏を連れて寺院の外に出て南・西・北・東の4つ門の方角を一回に巡礼する。それが中国では「転廟」と呼ばれ、転廟の際にはその各門の方角で『供養曼荼羅（མཆོད་ཀྱི་མཛུགས་）』を誦する。	
	11:45～1:10	チャムという舞踊を行う。（2014年の年報、非文字資料研究の第10号に詳しい。）	
	3:00～17:30	信者のために読経する。	
終り			

き、山門外の玉泉井の前の空地で読経僧の指導者であるソックチン・ウンサトラマ（読経のリーダー僧）により儀軌経を誦し、ザスック・ダーラマ（副住職）がバリンの先端を外に向けて燃えた火の中に投げ込み、悪魔や悪鬼などを追い払う。このバリンを燃やす火は、事前に木材やハター（モンゴルの長い絹織物）などで高く積んだ焚き物にディーゼルオイルをかけて、点火したものである。

## IV チェージャル・バリンの比較と解説

### (1) チェージャル・バリンの比較

#### ① チェージャル・バリンの種類

チェージャル・バリンの構造に関しては、主として2種類の形態がある。第1種は、主にハダカムギ粉を三角錐状に指し、約30センチの高さを手でこねて作ったものである（写真18、19）。下部の



写真 18 ラサ市小昭寺のチェージャル・バリン  
(2015 年旧暦 9 月 14 日筆者撮影)



写真 19 ラサ大昭寺のチェージャル・バリン  
(2013 年旧暦 7 月 10 日筆者撮影)

周囲に 4 つの三角柱状のルーグ (ལུག) と呼ばれるものがある。すべて紫草とバター (ミルクの油) で作った赤い汁を塗っている。ルーグの平面はそれぞれ 16 格子に切られており、全部で 64 格子になる。この第 1 種のチェージャル・バリンは、小型な法事や信者からの要望に対応するものである。

第 2 種のチェージャル・バリンは、筆者が調査した青海省のクンブム・チャムパーリン寺のラマ僧ジャムソによると、三角形の大きな皿で、ハダカムギ粉で三角錐状にこねて作ったものである。下部の周囲に 4 つの三角柱状のルーグ (ལུག) があり、第 1 種と同様に 64 の格子がある。第 2 種は第 1 種と比べると特に高く大きいものである。また、指、手でこねて作った三角錐状の上に 1 本の「命木 (མཆོད་མེ་ལྷོ་མེ་ལྷོ་མེ)」という木竿を挿し込んでいのも特徴的である。これは骨幹の象徴である。この骨幹の上に挿し込んだ<sup>どくろ</sup>髑髏と耳、<sup>けいこつ</sup>脛骨と炎を飾るものもあるという。前述のように、第 1 種のチェージャル・バリンは規模が小さいため、信者から要望された法事で使用されるのに対して、第 2 種は寺院の大型法会において、毎年 2 回だけ使用される。

本稿では、第 2 種のチェージャル・バリンに対して詳しく論述をしていきたい。調査した各地域のチェージャル・バリンを外側から見ると、全体の形態はほぼ同じであるが、その内部の構造と形態は大きく異なっている。写真 20～25 は調査した各寺院のチェージャル・バリンの現状である。このような複雑なバリンに対して、すべての構造を明らかにすることは困難であるため、本稿では内モンゴルにおけるイック・ジョー (寺) のチェージャル・バリンの事例を中心に分析する。



写真 20 ラプラン (寺) のチェージャル・バリン  
(2016 年旧暦 1 月 15 日筆者撮影)



写真 21 雍和宮のチェージャル・バリン  
(2016 年旧暦 1 月 29 日筆者撮影)



写真 22 ロンウォ・ゴンパ（寺）のチェー  
ジャル・パリン  
(2015 年旧暦 1 月 15 日筆者撮影)



写真 23 クンプム・チャムパーリン  
(寺)のチェージャル・パリン  
(十二羅生門「本日塔尔寺の蔵歴の 11 月 29 日」  
[https://mp.weixin.qq.com/s/2Y5\\_Kx8v2BLfJlYhbKzOuQ](https://mp.weixin.qq.com/s/2Y5_Kx8v2BLfJlYhbKzOuQ),  
2016 年 1 月 8 日に作成した)



写真 24 イック・ジョーのチェー  
ジャル・パリン  
(2016 年旧暦 1 月 14 日筆者撮影)



写真 25 シレート・ジョーのチェー  
ジャル・パリン  
(2016 年旧暦 1 月 14 日筆者撮影)

## ② 各地域の比較分析

先述した 6 つの寺院のチェージャル・パリンの象徴的意味は經典に書かれている意味と同じであるが、筆者の調査において各地域の紙の色や素材、および形態が異なっていることが判明した。写真 20～25 の 6 枚の写真を比較すると、その違いが分かる。各寺院のチェージャル・パリンの形態はほぼ同じである。例えば、三角形の大きな皿に安置された人形のような身体、髑髏、耳、首の脊椎骨、金剛杵、炎などについては皆、同じである。しかし、地域や師匠からの伝承の差異により、パリンの内部はかなり異なっている。その原因の 1 つは、現在内モンゴルにおけるイック・ジョー（寺）やシレート・ジョー（寺）のような寺院において、遊学した僧や仏学に精通しているラマ僧が少ないことにある。そのため、伝承の過程で相違が出現したと考えられる。各寺院のチェージャル・パリンの特徴は、表 2 に整理した通りである。

表2

番号		A—①	A—②	B—①	C—①	C—②	E—①
寺院		イック・ジョー	シレート・ジョー	ラブラン寺	ロンウォ寺	クンブム・チャムパーリン寺	雍和宮
名称		バリン	バリン	チェージャル・ドルマ	チェージャル・ドルマ	チェージャル・ドルマ	ドルソル(バリン)
色	内部の色	黒色	原色	赤色	黒色	赤色	赤色
	外部の色	赤色と紫色	雑多な色	赤色と黄色	赤色	赤色	赤色
金剛杵		○	○	○	○	○	○
髑髏		○	○	○	○	○	○
耳		○	○	○	○	○	○
頸骨		○	○	○	○	○	○
命樹		○	○	○	○	○	○
腸		○	△	△	△	△	△
三角錐		△	△	○	△	○	○
ルーフ		○	○	○	○	○	○
六十四格子		○	○	○	○	○	○
主要素材	麦粉の種類	莜麦	莜麦	ハダカムギ	ハダカムギ	ハダカムギ	ハダカムギ
	色紙	○	○	○	△	○	○
その他の素材	肉	△	△	△	△	△	△
	お酒	△	△	△	△	△	△
	三甘三白	○	○	○	○	○	○
	薬(粉)	○	○	○	○	○	○
備考							

## (2) チェージャル・バリンの構造——イック・ジョー（寺）の事例

イック・ジョー（寺）のチェージャル・バリンの素材は、主に莜面と紙、および木の棒である。チェージャル・バリンを作るには、まず、フフホト市武川県の特産である莜面という麦粉をボールの中に入れて、少量の薬と水でこねる。図1の⑨のようにある三角形の大皿の真中に1本の「命木(མེད་མེད་)」という木の棒を挿し込む。三角形皿の端からそれぞれ棒に向かってこねて作った、高さ15.6 cm、幅15 cm ほどに莜面をこねて成形し、棒を支える。この莜面に黒い色を塗る。棒は骨幹を象徴するものである。

次に、図1の⑦のように火の模様に切った台形型の赤い紙を2枚用意し、その間に3本の細くて長い草を挟んで糊で貼り合わせる。同様に、それを3枚作る。模様の周りに髑髏の形をした白い紙を貼る。そして、棒に向かって三角形にする。これを先ほどの三角形皿の中のこねた莜面の上に挿す。これは炎を象徴している。この炎の上に、一

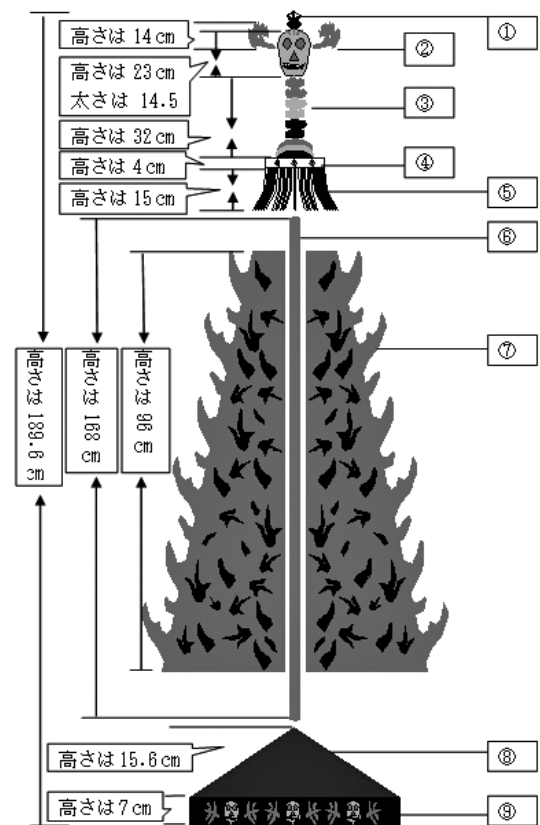


図1 イック・ジョー（寺）のチャジャル・バリンの構造  
(2016年筆者作成)

片の紙を貼った立方体の三角形を被せる（図1の④を参考）。そして、立方体の三角形の各面に3つの髑髏の形をした紙を貼る。

また、この上に莚面で作った黒・白・赤の円盤形（図1の③を参考）のものを下から順番に棒に挿し、その上に莚面でこねて作った首の脊椎骨の形にしたものを挿す。その上に、紙で作った髑髏を挿し、その両耳に炎の形に切った紙を挿して貼る。これは、耳を象徴するものである。

最後に、髑髏の上に金剛杵を挿し、莚面の上に挿した炎に束ねた紫色の紙をホチキスで止める。これを下から上に3段重ねることで人間の衣服を象徴している。その上から白くて長い紙を飾る。これは人間の盲腸を象徴している。これらを総称してモンゴルの民間では「鬼」と呼んでいる。図1はイック・ジョー（寺）のチェージャル・バリンの構造を示したものである。また、図2はチェージャル・バリンの下部の三角形の皿を示したものである。

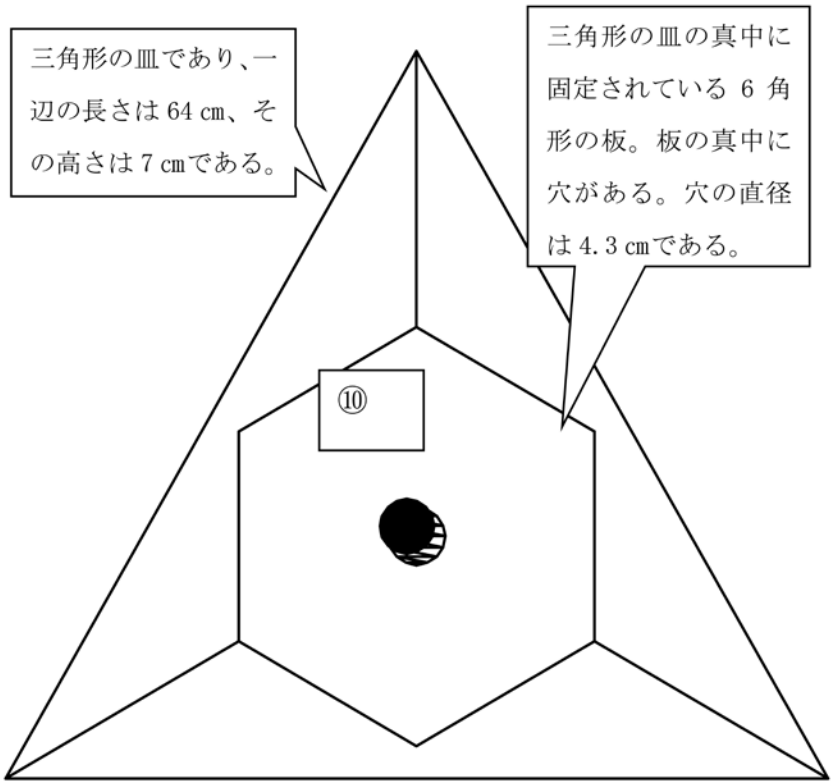


図2 チェージャル・バリン下部の三角形の皿  
(2016年筆者作成)

表3 図1・2中に付けた①～⑩の各部の名称・素材・色・については表3の通りである

①	象徴する名称	素材	色	備考	⑥	象徴する名称	素材	色	備考
①	金剛杵	紙	黒い		⑥	命木・骨幹	木の棒	無	
②	耳	紙	赤		⑦	炎	紙	赤	
③	首の脊椎骨	莚面	赤 白 黒		⑧	バリンの底部	莚面	黒	
④	傘の頂	紙	白		⑨	三角形の大皿	木材	黒	髑髏
⑤	傘の垂れ幕	紙	白		⑩	大皿の内部	木材	黒	

## V チェーシャル・バリン儀礼の意義と役割

### (1) 民俗から見た意義

チェーシャル・バリン儀礼について考えるべき2つの意義は「民俗から見た意義」と「祈願儀軌から見た意義」である。民俗的な意義では、チェーシャル・バリン儀礼は地域の人々に「鬼を送ること」と呼ばれている。中国の春祭りでは、鬼が登場する儀礼が多くあり、チェーシャル・バリン儀礼もその1つである。春祭りには、人々の健康や農作などを祝福する意味合いがある。つまり、寺院で行われているチェーシャル・バリン儀礼は、春祭りとして鬼を表現する民俗的なイメージがあると考えられている。

廣田律子は『鬼の来た道——中国の仮面と祭り』で、「見えない鬼は、見えない故に恐れられ、人に病気や種々な不幸をもたらす悪鬼とされ、追儼の行事では逐われる対象となる」と指摘している（廣田 1997：36）。この「追儼の鬼」はチェーシャル・バリン儀礼の「鬼を送ること」という意義の点で類似する。実際、鬼に対し民族によって違う意味を持っていると考えられる。

折口信夫は、鬼とは、日本の古代において単に巨人を意味するものに過ぎなかったと述べている。現代人が考えるような牛の角に虎の皮の禪ふんどしという姿ではなかった。折口が指摘した鬼は、祖先の霊であった（折口 1967：404）。祖先の霊は、内モンゴルにおいて大晦日に人々に祀られている。大晦日は鬼が現れるため、家から出てはいけないとされる。内モンゴルのチベット仏教寺院は、大晦日に「鬼」「亡霊」などを中心に法要が行われる。この後、正月の14日あるいは15日にチェーシャル・バリン儀礼とチャム儀礼で鬼が現れることになっている。この儀礼は、1年の初めに、世間から旧年の「鬼」という種々な不幸などを祓って、翌年に向けての「国泰民安」を願うために行われる。同様に、異界から神様が訪れて、個人の祝福とともに、翌年に向けての稲作の豊穡を祈願するという意味を持っている。

### (2) 祈願儀軌から見たバリン儀礼の意義と役割

中国では、大晦日の除夜に祖先の霊を祀る風俗がある。大晦日から正月の末の間、チベット仏教寺院では祈願大法会が行われる。正月の法会に関連して忘れてはならないのが、悪鬼を追い祓う行事におけるチェーシャル・バリン儀礼とチャム儀礼である。祈願大法会で鬼を追い祓うことについて、儀



写真 26 六十食子簡易供養祈願儀軌経（イック・ジョー（寺）の手写本）  
（2016 年旧暦 1 月筆者撮影）

イック・ジョー（寺）のチェージャル・バリン儀礼に対応する経典は、チベット語の『བླ་མ་གསུང་རྒྱུད་ཀྱི་འཇཉག་པོ་ལྟ་བུ་བྲམ་པོ་』という経である（写真26）。この経典は簡略に言えば「ルウヴェー」（ལུ་ཤེད）と呼ばれる。『蔵漢大辞書』によると、「六十食子」の意味であるが、四方の十五護法神と閻魔に祈願する四業成就の1つの宗教活動と言える（張怡孫〔孫〕2008：1332）。

### ① 念誦の方法

## ② 神の観想

### ③ 念誦から見たバリン儀礼の役割

### (3) 文献から見たバリン儀礼の意味

248

ムパーリン寺のジャムソ・ラマ僧から聞いた内容と似ている。

ジャムソ・ラマ僧の話によれば、チェーシャル法王に対応した三角錐状の形は武器であり、現在の爆弾のような強い武器を象徴するものであるという。また、チェーシャル・バリンの下部の4つのルーフは、大威徳金剛の眷属<sup>けんぞく</sup>である十五護法神を4回、供えることを意味している。各ルーフの平面の16格子の模様はそれぞれの神に対応している。つまり、チェーシャル・バリンの全体の飾り物は、4つのルーフのようにそれぞれに象徴として機能しているのである。今回調査した各寺院のチェーシャル・バリンは、全体の形こそ違うものの、ルーフの64格子の模様を持つことが変わらないのは、チェーシャル・バリンの象徴的意義によるものであると言える。

また、三角形の黒い木の皿の上に骸の骨のような人形バリンがあり、頭の髑髏の部分は十方各地に充満している怨霊、悪鬼、悪魔などの血肉骨幹を積み上げたものである。多くの霊や鬼あるいは種々な不幸なことが、須弥山のように高く集中することを象徴している。それに対してラマ僧が祈願儀軌の読経により大威徳金剛（本尊）の法力を借りて、チェーシャル（閻魔）の法力を得ることで、チェーシャル・バリンはチェーシャル（閻魔）の骨杖になって、一切の怨霊や悪鬼などを壊滅すると言える。そのため、チェーシャル・バリン儀礼は法要の法力として、強力で鋭利な武器のような機能と考えられているのである。

## まとめとして

本稿は、中国の2つの自治区と2つの省、および1つの直轄市におけるゲルク派の有名な寺院と内モンゴルフフホト市の寺院のチェーシャル・バリン儀礼を比較することで、チェーシャル・バリン儀礼の地域的異同を明らかにすることができた。

1993年、筆者がイック・ジョー（寺）で学僧として修行していた時、チェーシャル・バリン儀礼が行われていた。その時のバリンの製作方法や形態は現在と全く変わらない。一方で、戦争や政治運動などの要因から、民衆たちの食糧が減って貧しくなっていく中、大量の麦粉を使用するバリンは簡略化してきたように見える。殿堂中に木を作ったバリンがあるという事例は、本調査において印象に残るものであった。また、本稿では各寺院のバリンという供物の相違を外面的現象と内部的現象に注目して分析を試みた。だが、今回調査した現在のイック・ジョー（寺）のバリンに関する詳細な資料は本稿で十分に生かしきれなかった。先代の師匠からの伝承の差異がバリンの種類や形態などに影響を及ぼしているのではないかと推測されるが簡単に結論を出すことは難しい。

今後は本稿で記述したような現状を踏まえ、イック・ジョー（寺）のラマ僧の仏法の啓蒙に関しても考えていくことが必要である。民衆や信者たちが仏教の儀礼を理解する上で、ラマ僧の説法の役割も重要だと思われる。

## 謝辞

本稿の聞き取り調査にご協力いただきました多くの方々に心より感謝の意を表し、厚く御礼を申し上げます。

## 注

- (1) 三密法とは僧侶たちが修行の時に身、口、意、すなわち身に印を結び、口に真言を唱え、意は心の中で本尊を観想する修法である。この三者を本尊と一体化させ、即成就を図る。三密加持法ともいう。
- (2) 観想とは、神仏に対象として心を集中して深く考察することである。
- (3) 閉関修行というのは、静かな場所に隔離され誰とも接触せずに修行を行うことである。
- (4) 内モンゴル自治区が成立したいわゆる内モンゴル解放は1947年の事である。
- (5) 全国重点文物保护单位とは、中華人民共和国国務院が指定した国家級の文化遺産保護制度の1つの名称である。1961年から現在まで7次に渡って布告されている国家レベルのものを「全国重点文物保护单位」と呼び、日本の国宝に相当する大変貴重な寺院である。
- (6) 筆者翻訳：ラプラン寺（ལཔ་རྒྱལ་དགོན་, 拉卜楞寺）の第一世活仏であるジャムヤン・ショトバ（ཇམ་པ་ཤོ་ཏོ་བ་ 1648年-1721年）著『ドルマ勝樂論義明解經典』である。
- (7) サンヒターとは、古代インドの聖典であるリグ・ヴェーダ文献において「本集」の部分を目指す。
- (8) 青稞は『中日大辞典』（1999）によると、「ハダカムギ」、「オオムギ」の意味である。
- (9) 大皮袄とは、毛皮の裏地を付けたジャケットの意味である。
- (10) 薬粉では、内モンゴルは蔵薬中の25種類（或いは18種類ともいわれる）の浄薬（蔵薬）より組み合わせた粉末を作った。「サンルー」という。
- (11) 三甜三白（དཀར་པོ་གསུམ་པོ་མཆོད་པོ་གསུམ་པོ་）では、氷砂糖（ཤིང་ཁ་ཁ་）、赤糖（ལྷ་ཁ་）、蜂蜜（མེ་ཁ་）ミルク（མེ་ཁ་）、ヨーグルト（མེ་ཁ་）、バター（མེ་ཁ་）を指す。
- (12) 大威徳金剛はチベット語ではドルジェ・ジグジェー（འོ་རྒྱལ་ལྷ་མོ་）は漢訳で大威徳金剛であり、日本語では大威徳明王という。モンゴル語ではサンスクリット語の音訳でヤマーンタカ（yamantaka）と呼ばれている。チベット仏教のゲルク派において大威徳金剛は、本尊である。
- (13) 灌頂とは、チベット仏教において主要な密宗で頭頂に水を灌いで諸仏や曼荼羅と縁を結び付け、種々の伝承資格を受けて正統な継承者とするための儀式的のことを言う。
- (14) 伝召法会では、中国式の伝統的馬車内に安置されたミロク仏を連れて寺院を巡礼する。
- (15) ゲルク派（དགེ་ལཱ་གཙུག་ལྷན་, 徳行派の意味）は14世紀に改革者のツォンカパ（ཙོང་ཁ་པ་ 1357~1419）大師によって創設された。僧侶は黄色の帽子を着用したために、民間では別名黄教と呼ばれる。ゲルク派は当時廃れていたカダム派の教えを復活させ、僧侶による戒律の遵守および哲学や宗教的な論議を重視した。多くの支持を獲得したゲルク派は、主に六大寺院「ガンデン（甘丹）、ゼバン（哲邦）寺、ザシロンブ寺、スウラァ（色拉）寺、タール（塔尔）寺、ラプラン寺」を建設した。宗喀巴大師の代表的著作は『菩提道次第広論』（བླ་མ་ཐུགས་རྒྱལ་པོའི་ཆོས་ཀྱི་མཁའ་མཛོད་ 1402年）と『密宗道次第広論』（གསལ་པོ་ཐུགས་རྒྱལ་པོའི་ཆོས་ཀྱི་མཁའ་མཛོད་ 1406年）という經典である。

## 参考文献

### 日本語文献

- 折口信夫 1967『折口信夫全集』（第16巻）東京：中央公論社
- 片山一良 1974「バリ（Bali）儀礼——歴史とその意味（上）」、『宗教学論集』（7） pp. 79-91
- 片山一良 1975「バリ（Bali）儀礼——歴史とその意味（上）」、『宗教学論集』（8） pp. 103-122
- 嘉木揚凱朝 2004『モンゴル仏教の研究』京都：法蔵館
- 田中公明 2001『チベット仏教絵画集成——タンカの芸術——』（第3巻）ソウル：ハンビッツ文化財団
- 根敦阿斯尔 2011「ラマ教寺院の年中行事——内モンゴル「大召寺」のマニ法会を対象に——」、『比較民俗研究』25 pp. 152-163 比較民俗研究会
- 根敦阿斯尔 2014「チベット仏教寺院における仮面芸能（チャム）の比較研究——内モンゴル「大召寺」を中心に——」、『年報 非文字資料研究』10 pp. 383-407 神奈川大学非文字資料研究センター
- 廣田律子 1997『鬼の来た道——中国の仮面と祭り』東京：玉川大学出版部
- 森雅秀 2011『インド密教の儀礼世界』京都：世界思想社

- 森雅秀 1994 「インド密教におけるバリ儀礼」、『高野山大学密教文化研究所紀要』8 pp. 179-204 高野山大学密教文化研究所
- 山折哲雄 1993 『仏教民俗学』 東京：講談社
- 愛知大学中日大辞典編纂処 1999 『中日大辞典』（増訂第二版）大修館書店

## 英語文献

- Sárközi, A. 2003 A Picture Book of Tibetan Hell. Kélény, B (ed.) *Demons and Protectors: Folk Religion in Tibetan and Mongolian Buddhism*, pp. 99-110 Budapest: Ferenc Hopp Museum of Eastern Asiatic Art.
- Beyer, S. 1978 *The Cult of Tara: Magic and Ritual in Tibet (Hermeneutics: Studies in the History of Religions)*. California: University of California Press.
- Kane, P. V. 1974. *History of Dharmaśāstra Vol. 2 (2 parts)*. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute (2nd ed.)
- Majer, Z & Teleki, K. 2014 Reviving the Cam Dance Tradition in Mongolia. Budapest: Eötvös Loránd University, Department of Inner Asian Studies.
- Nebewsky, R. D. 1996 *Oracles and Demons of Tibet: The Cult and Iconography of the Tibetan Protective Deities*, pp. 343-344 India: Books Faith.

## 中国語文献

- 丹迥冉納班雜・李德成 1997 『名双黄寺——清代达賴和班禪在京駐錫地』 北京：宗教文化出版社
- 法王周加巷 1994 『至尊宗喀巴大師傳（傳）』 郭和卿訳 西寧：青海人民出版社（修訂本）
- 郭本兆 1987 『青海經濟植物志』 西寧：青海人民出版社
- 黄勇 2004 『拉萨尼寺梵唄——阿尼倉空宗教儀軌供品研究』 北京：中国藏学出版社
- 嘉木揚凱朝 2009 『中国蒙古族地区佛教文化』 北京：民族出版社
- 南拉太 2015 『藏傳佛教“朵（朵）瑪”祭祀的民族志研究——以青海貴南県托勒寺為考察中心』 西藏大学、修士学位論文
- 蒙瑞萍 2013 「内蒙古西部方言与莜面飲食民俗文化」『包頭職業技術学院報』14 pp. 15-17p
- 賽音塔娜他 2004 『中国民俗大系・内蒙古民俗』 蘭州：甘肅人民出版社
- 図斉 (G. TUCCI)・海西希 (W. HEISSIG) 1989 『西藏和蒙古の宗教』 耿昇訳 北京：中国藏学出版社
- 姚曉華・吳昆仑 2013 「PEG 預處理对青稞種子萌發、幼苗成長和抗旱性的影響」『中国農業大学学报』6 pp. 80-87
- 張怡菝（蓀） 2008 『藏漢大辭書』 北京：民族出版社
- 張宗显他 2004 『中国民俗大系・西藏民俗』 蘭州：甘肅人民出版社

## チベット語文献

- 官却加布 2011 「བོད་ཁྱིམ་གྱི་མཉམ་འབྲས་ལ་དབྱེད་པ། རེབ་ཅོང་ཐུགས་མང་དཔེར་བཅུང་ནས་བརྗོད་པ། (中国語：藏族 “朵（朵）瑪” 一詞研究——以熱貢阿芒為例)」 中央民族大学、修士学位論文

ལྷན་མཁྱེན་འཇམ་དབྱངས་བཞད་པ་སྐུ་མཆོད་དང་པོ་དག་དབང་བརྩེན་འབྲས་གྱིས་མཛད། གཏོར་མའི་རྩམ་བཤད་རྩལ་བའི་བདེ་ལམ་གཞིར་དོན་རབ་གསལ་ཞེས་བྱ་བ་བཞུགས་སོ། རྒྱ་བྲང་བཟླ་ཤིས་འབྱེད་གྱི་པར།  
དག་ཅུ་བ་བསྐྱུས་པའི་དག་བདོན་བཞེད་དབྱང་ལྷན་འཇམ་མཉམ་ཞེས་བྱ་བ་བཞུགས་སོ།

## 参照したホームページ (URL)

- 道客巴巴 2012 年 12 月 25 日「大召 国家级重点文物保护单位, 汉名“无量寺”」  
<http://www.doc88.com/p-973359379216.html>
- 十二羅生門 2016 年 1 月 8 日「本日塔尔寺の藏歴の 11 月 29 日」  
[https://mp.weixin.qq.com/s/2Y5\\_Kx8v2BLfJIYhbKzOuQ](https://mp.weixin.qq.com/s/2Y5_Kx8v2BLfJIYhbKzOuQ)